

第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査

1. 農学部附属動物医療センター改修Ⅱ期工事に伴う本発掘調査

調査地区 吉田構内T-20区

調査面積 約48m²

調査期間 平成19年7月9日～24日

調査担当 横山成己・藤野好博

調査結果

(1) 調査の経緯（図4）

平成18年度、山口大学吉田構内南東端部に所在する農学部附属動物医療センター南面において新規建物の造築工事が立案された。工事予定地に対して、当館は予備発掘調査及び本発掘調査を実施し、古代の大型掘立柱建物跡等、極めて重要な埋蔵文化財資料を多数確認した。

平成18年度末に改修Ⅱ期工事としてⅠ期工事地の東隣に患畜入院室・診察室を使用目的とする増築建物工事が新たに計画されたため、埋蔵文化財保護のための対応が必要となった。

平成18年度の調査により、Ⅱ期工事予定地は吉田構内の南東にそびえる今山から北西に向かい舌状に派生する低丘陵上に当たり、現地表面下約0.4

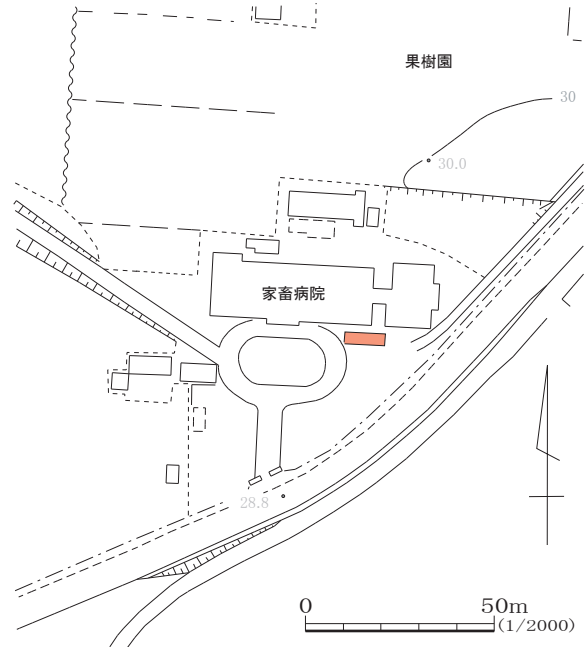


図4 調査区位置図

mには遺構が残る地山が検出されることは明らかであった。本学開発部局と設計変更による保護処置を検討したが、Ⅰ期改修で建築した増築建物との関係から、盛土等でフロアに段差が生じることは病院建物という性格上好ましくないとの見解が提示された。最終的に、本学埋蔵文化財資料館専門委員会にて「発掘調査による埋蔵文化財の記録保存」の判断が下されたため、開発予定地に対し発掘調査を実施する運びとなった。

(2) 調査の経過

改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査成果により、動物医療センター南面は既存建物壁より南方に約5mもの範囲で大きく攪乱を受けていることが判明した。よって今回は掘削範囲を最小限に止めるため、開発予定地南端から南北4m×東西12mの範囲で調査を実施することとした。調査経過の概略は以下の通りである。

7月9日より重機掘削を開始し、7月11日には遺構の検出を終了。7月12日より遺構の半裁掘削および記録作業を行い、7月18日までに遺構を完掘した。その後、写真撮影、測量を実施し、7月23日には記録に関する全ての作業を終了。7月24日に調査区の埋め戻しを行い、調査を完了した。改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査同様、梅雨時の調査となったため、雨天によりしばしば調査を中断したが、概ね順調な作業工程であった。

(3) 基本層序（図5、写真11～12）

調査地現地表面の標高は約30mを測るが、東から西に向かい僅かに降下している。基本層序は、調査区西部においては

第1層…碎石（層厚約5cm）

第2層…造成土（層厚約20cm）

第3層…黄灰色（2.5Y4/1）弱粘質土（層厚約5cm）～旧耕土

第4層…灰黄色（2.5Y5/1）粘質土に砂粒混ざる（層厚約10cm）～旧床土

第5層…にぶい黄褐色（10YR4/3）砂礫土～遺構検出層（地山）

となっている。一方、調査区東部では造成土直下が地山となっているが、これは本地には旧来棚田が営まれており、山口大学移転時に高所を削平し低所を埋め立てる工法により平地を確保したことに由来するものである。旧耕土が残る調査区西部の地山が砂礫層であるのに対し、東端部では明黄褐色（10YR6/6）の岩盤風化層が露出していることも、大学造成時に上位の棚田が大幅に削平を受けたことを物語っている。

検出した地山面は、北東から南西に向かい緩やかに降下している。これは、旧来この地が調査地点の南西を南東－北西方向に走る谷部に向かい降下する微傾斜地であったことを反映するものであろう。

（4）遺構（図5・6、写真7～10）

調査前の予測通り、動物医療センター既存建物の約5m南方まで基礎掘方が及んでおり、調査区内で旧地形をある程度留めていたのは調査区東部で南北幅約3.2m、西部で南北幅約2mの範囲に限定された。また、調査区西端部は既存の配管により攪乱を受けている。

検出された遺構は、土壙3基、Pit28基であり、以下に個別解説を記す。

土壙1

調査区の北西端部に位置する。検出当初は土質から攪乱坑と判断したが、埋土中に近現代に所属する資料も見られないため、ここでは遺構として報告を行う。

平面的には不整形の南東部を1/4残した形状を呈しており、北部は建物堀方により、西部は配管堀方により破壊されている。現況で東西幅約1.6m、南北幅1.4mを測る。遺構肩部より緩やかに傾斜して北西隅の底面最深部に至るが、その深さも0.13mを測るに過ぎない。遺構埋土は褐灰色（10YR5/1）弱粘質土に1～3cmφの礫が少量混ざっている。

出土遺物はいずれも土器資料であり、須恵器61点、土師器12点、瓦質土器体部片の可能性のある小片7点を数える。実測可能資料は須恵器に限られ、いずれも細片である。須恵器を観察する限りでは9世紀後半を中心とする時期を考えたいが、瓦質土器状の小破片の存在から中世にまで降る遺構である可能性が残る。

土壙2

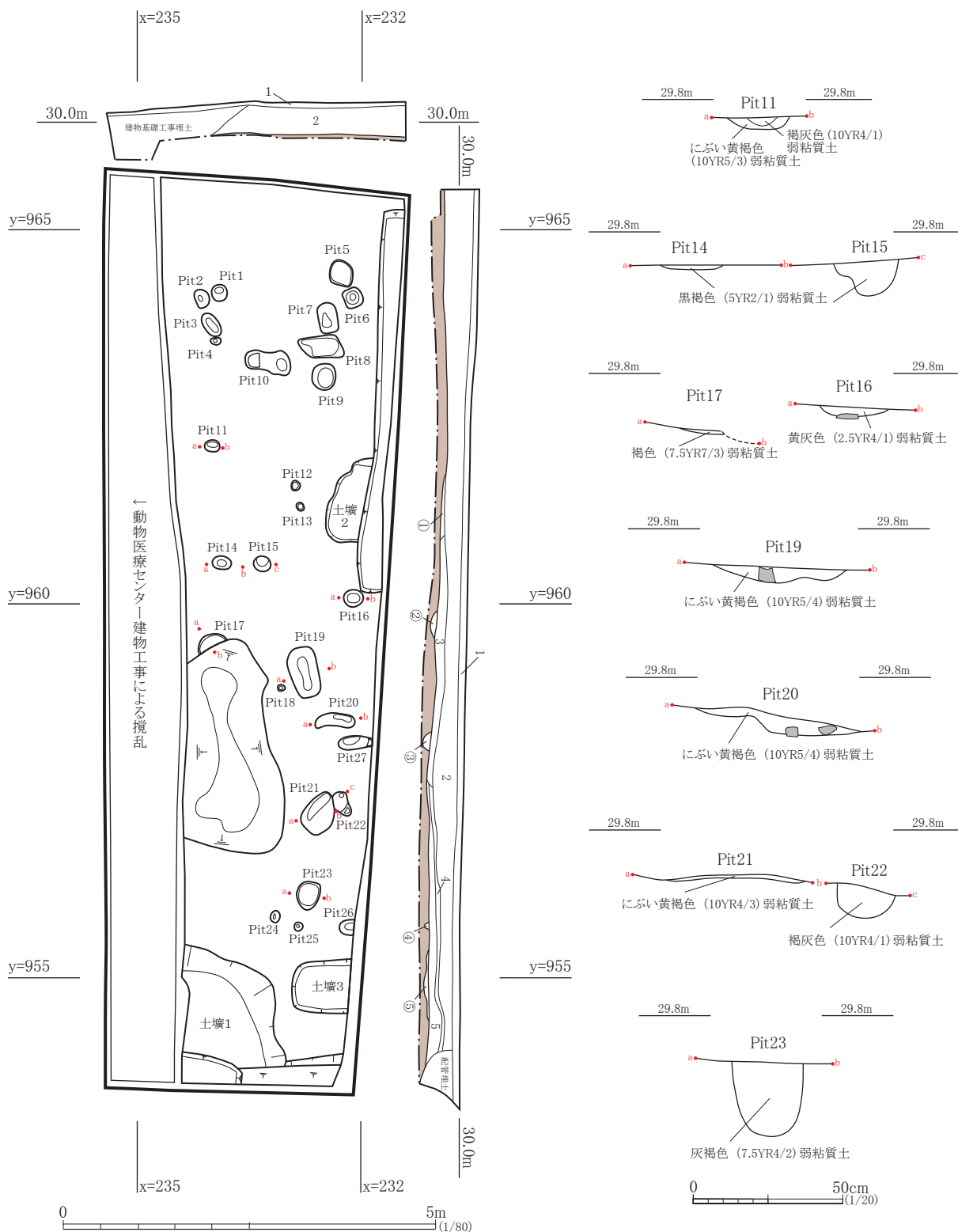
調査区中央やや東寄りの南壁側で検出された。ここでは土壙としたが、平面不整形の浅い落ち込み状の遺構であり、南壁土層断面第3層（造成土2）により南側を掘り込まれている。

埋土からは近世から近代のものと思われる平瓦の小片が出土しており、過去に形成されていた棚田に関わる施設であった可能性が高い。

土壙3

調査区西部の南壁側に位置する。現状で南北を主軸とする隅丸長方形を呈しているが、南側は調査区外となるため遺構の全形は不明である。現状で東西幅約0.7m、南北幅約0.8mを測る。底面中央が南北方向に一段下がっているが、埋土は均一であった。

出土遺物は極少量であり、須恵器片3点、瓦質土器釜口縁部片1点を数えるのみである。後者の存在から遺構の形成時期は中世、14世紀以降に求められる。



- 1 碎石
- 2 造成土1
- 3 造成土2
- 4 黄灰色 (2.5Y4/1) 弱粘質土…旧耕土
- 5 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土に 0.5 ~ 3 cm φ の礫が混ざる…旧床土
- ① にぶい黄褐色 (10YR4/3) 弱粘質土…土壌2埋土
- ② 灰黄褐色 (10YR5/2) 弱粘質土…Pit28 埋土
- ③ 灰黄褐色 (10YR5/2) 弱粘質土…Pit27 埋土
- ④ 灰黄褐色 (10YR4/2) 弱粘質土…Pit26 埋土
- ⑤ 灰色 (5Y4/1) 弱粘質土に 0.5 ~ 4 cm φ の礫が少量混ざる…土壌3埋土

図5 調査区平面図・断面図

図6 遺構断面図

Pit群

調査区全面にわたり総数28基のP i tが確認された。この内、調査区東部で確認したP i t 1～10は、埋土が旧耕土及び床土と同様であり、P i t 8には内部にコンクリート片が埋存していた。大学造成の際に何らかの工法のため上層土が押し込まれたものと判断している。

その他のP i tについても、調査範囲が狭小であるため、建物跡等を復元できる状況にない。出土遺物に関しては、P i t 15から須恵器1点、土師器4点が、P i t 23から須恵器2点、土師器8点が、P i t 27から須恵器1点、土師器2点が出土しているに過ぎない。土壌の遺物相を考慮すると、各P i tの安易な時期比定は控えるべきと考える。



写真7 遺構検出状況（北西から）

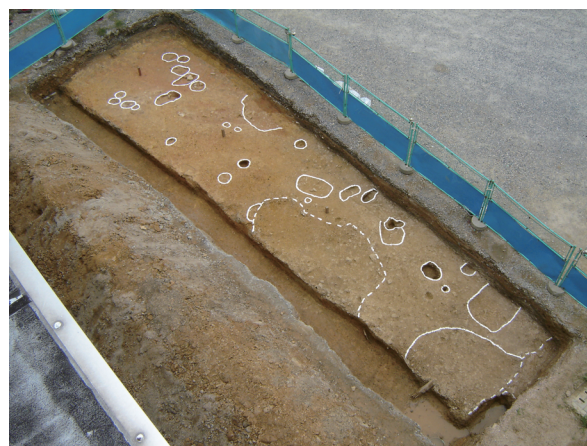


写真8 遺構完掘状況（北西から）



写真9 遺構完掘状況（西から）



写真10 遺構完掘状況（東から）



写真11 調査区南壁西端部土層断面（北西から）



写真12 調査区南壁東端部土層断面（北から）

(5) 遺物（図7・8、写真13・14・15、表2）

当調査において遺構および遺物包含層から出土した資料はいずれも土器の細破片であり、口径・底部径等の復元は不可能なものばかりである。

土壙1からは総数80点土器が出土している。土師器、須恵器、瓦質土器の可能性のある体部の小片であるが、図示可能なものはいずれも須恵器である。1～3は蓋口縁部。2・3は口縁端部を下に摘み出し丸く収めている。4～6は坏身口縁部。内湾するもの（4）と外反するもの（5）、直線的に立ち上がるもの（6）とが混在する。7～9は坏身底部。体部が直線的に立ち上がるもの（7）と大きく外に開くもの（8・9）がある。10・11は高台付坏身の底部。いずれも高台が底部外端部に近い位置に貼り付く。12～14は甕口縁部か。ナデにより内端部に段が形成されるもの（13・14）と平坦なもの（12）とがある。

土壙3からは総数4点の土器片が出土しているが、図示可能なものは須恵器1点と瓦質土器1点である。15は須恵器高台付坏底部。体部および高台内端部を欠失している。16は瓦質土器羽釜口縁部。やや内傾する口縁端部外面直下に突帯を巡らせるものである。内外面とも炭素吸着が甘くほぼ土師質焼成となっている。

Pit15からは須恵器1点・土師器4点が出土しているが、図示可能なものは須恵器1点のみである。17は坏蓋口縁部。端部を下に摘み出し、尖り気味であるが丸く収めている。天井部へはくびれを持たずドーム状に持ち上がる。

旧床土からは総数69点の土器片が出土している。内訳は須恵器57点、土師器5点、瓦質土器6点、磁器1点であるが、図化するものは須恵器11点、土師器1点に過ぎない（18～29）。須恵器にはかえりをもつ坏蓋口縁部（18）も見られるが、概ね8世紀後半以降の資料である。

旧耕土に関しては、重機掘削時に部分的に下位の旧床土まで削ったため、2層に包含される遺物を混在して取り上げている。総数150点の土器片が出土しており、この内須恵器17点、瓦質土器3点、青磁1点を図示している（30～50）。須恵器には坏蓋天井部および口縁部（30～35）、坏身底部（41）、高台付坏身底部（42～44）、高坏脚端部（45）、高台付壺底部（46）、瓦質土器には足鍋脚部（47・48）、播鉢（49）、青磁碗口縁部（50）がある。この内、須恵器坏蓋つまみ（31）は扁平化した偽宝珠形を呈す。吉田遺跡では出土例が少ないタイプであり、注目される。また、扁平なボタン状つまみを有する坏蓋（30）の内面には「×」字状のヘラ記号が施されている。

調査区中央部西寄りで確認された攪乱坑からも須恵器8点、瓦質土器2点が出土している。ここでは須恵器坏身底部（51）、瓦質土器鍋口縁部（52）、脚部（53）を図示しておく。

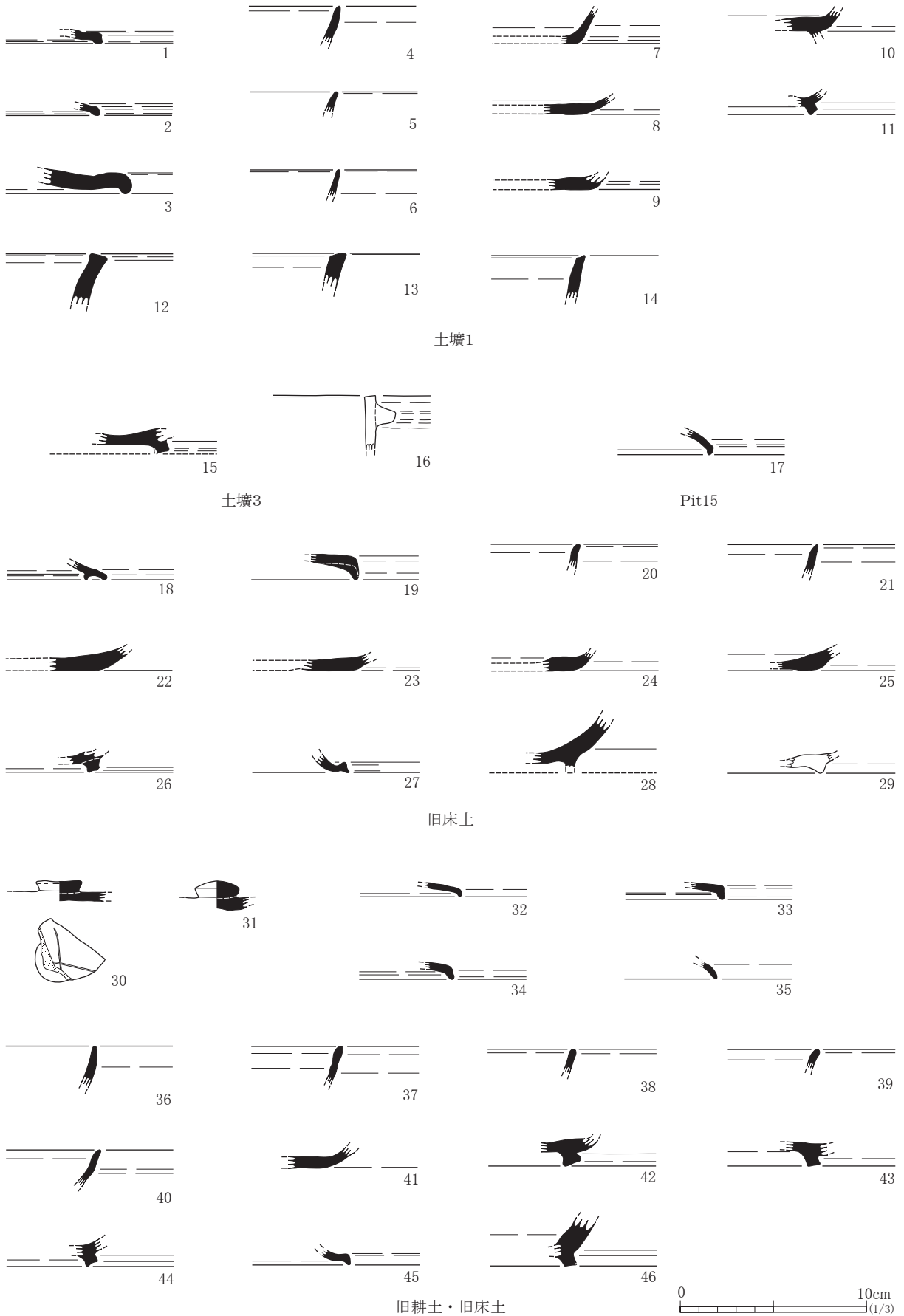
(6) 小結

当調査区は、平成18年度に実施した家畜病院改修Ⅰ期工事調査区の東に接する位置にあたる。18年度調査区の西部には古代の遺物を多量に包含する埋没谷が存し、その傾斜面には大型のものを含め掘立柱建物3棟存在することなどが確認された。今回の調査では、さらに東方へ遺構が分布することが判明したが、調査範囲が狭小であることから遺構の性格は不明確である。出土遺物に関しても、古代の須恵器資料が主体を占めるが、遺構埋土内には瓦質土器状の小破片も混在しており、各遺構の所属時期も不明と言わざるを得ない。周辺域での今後の調査でこれらの課題を解決する必要がある。

[註]

- 1) 平成19年1月1日に農学部附属家畜病院から山口大学動物医療センターに改称。
- 2) 横山成己・藤野好博（2010）「第1章第2節2. 農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』,山口

吉田構内（吉田遺跡）の調査



旧耕土・旧床土
図7 出土遺物実測図①

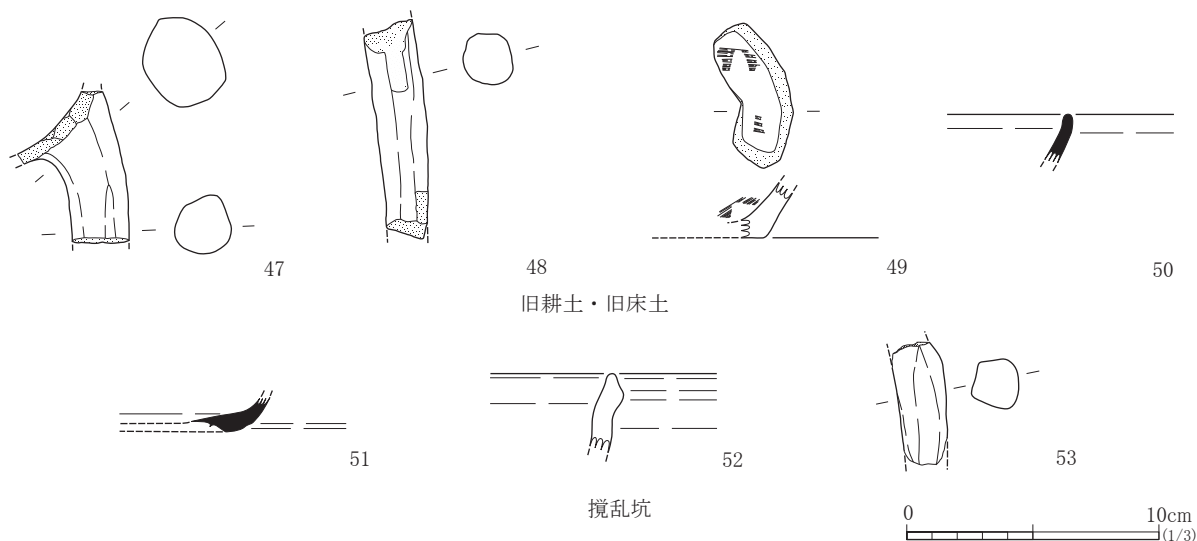


図8 出土遺物実測図②

表2 出土遺物観察表

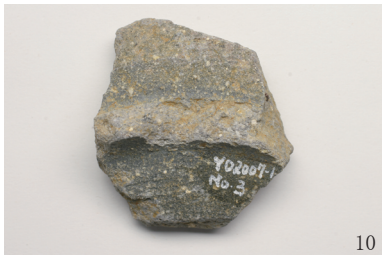
法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)			色調		胎土	備考
				①口径	②底径	③器高	①外面	②内面		
1	土壇1埋土	須恵器 坏蓋	口縁部				①明青灰色(5PB7/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mmφ以下の粗粒砂を 少量含む		
2	土壇1埋土	須恵器 坏蓋	口縁部				①②灰白色(N7)	1mmφ以下の粗粒砂を 多く含む		
3	土壇1埋土	須恵器 蓋	口縁部				①②明青灰色(5PB7/1)	3mmφ程の礫を少量含む 1mmφ以下の粗粒砂を 少量含む	風化が 目立つ	
4	土壇1埋土	須恵器 坏身か	口縁部				①灰白色(N7) ②青灰色(5B6/1)	1mmφ以下の粗粒砂を 含む		
5	土壇1埋土	須恵器 坏身	口縁部				①②灰色(N5)	1mmφ以下の粗粒砂を 含む		
6	土壇1埋土	須恵器 坏身	口縁部				①暗青灰色(5B4/1) ②青灰色(5PB5/1)	1mmφ以下の粗粒砂を 含む		
7	土壇1埋土	須恵器 坏身	底部				①②灰色(N6)	2mmφ程の礫を含む 1mmφ以下の粗粒砂を 多く含む		
8	土壇1埋土	須恵器 坏身	底部				①②青灰色(5PB6/1)	2mmφ程の礫を少量含む 1mmφ以下の粗粒砂を 含む		
9	土壇1埋土	須恵器 坏身	底部				①②灰白色(N7)	3mmφ程の礫を少量含む 1mmφ以下の粗粒砂を 含む		
10	土壇1埋土	須恵器 高台付坏身	底部				①暗青灰色(5B4/1) ②青灰色(5PB5/1)	1mmφ以下の粗粒砂を 多く含む		
11	土壇1埋土	須恵器 高台付坏身	底部				①②青灰色(5PB6/1)	2mmφ程の礫を含む 1mmφ以下の粗粒砂を 多く含む		
12	土壇1埋土	須恵器 甕	口縁部				①②灰色(N6)	1mmφ以下の粗粒砂を 少量含む		
13	土壇1埋土	須恵器 甕か	口縁部				①灰白色(N8) ②暗灰色(N3)	2mmφ程の礫を多く含む 1mmφ以下の粗粒砂を 少量含む		
14	土壇1埋土	須恵器 甕か	口縁部				①青灰色(5PB5/1) ②暗青灰色(5B4/1)	2mmφ程の礫を含む 1mmφ以下の粗粒砂を 多く含む		
15	土壇3埋土	須恵器 高台付坏身	口縁部				①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mmφ以下の粗粒砂を 多く含む		
16	土壇3埋土	瓦質土器 羽釜	口縁部				①褐色(10YR6/1) ②明黄褐色(2.5Y6/6)	2mmφ程の礫を含む 1mmφ以下の粗粒砂を 多く含む	風化が 著しい	
17	Pit15 埋土	須恵器 坏蓋	口縁部				①②灰白色(N7)	1mmφ以下の粗粒砂を 多く含む		
18	旧耕地	須恵器 坏蓋	口縁部				①②灰白色(N8)	精緻		

吉田構内（吉田遺跡）の調査

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量 (cm)		色調		胎土	備考
				①口径②底径③器高		①外面	②内面		
19	旧床土	須恵器 蓋	口縁部				①②灰白色(N7)	2mm φ 程の礫を少量含む 1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	
20	旧床土	須恵器 坏身	口縁部				①②灰白色(N7)	1mm φ 以下の粗粒砂を 少量含む	
21	旧床土	須恵器 坏身	口縁部				①暗青灰色(5B4/1) ②青灰色(5B5/1)	1mm φ 以下の粗粒砂を 少量含む	
22	旧床土	須恵器 坏	底部				①明黄褐色(10YR7/6) ②灰白色(N8)	精緻	風化が 著しい
23	旧床土	須恵器 坏	底部				①②灰白色(N7)	2mm φ 程の礫を少量含む 1mm φ 以下の粗粒砂を含む	
24	旧床土	須恵器 坏	底部				①②青灰色(5PB6/1)	2mm φ 程の礫を多く含む 1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	
25	旧床土	須恵器 坏	底部				①②灰白色(N8)	1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	風化が 目立つ
26	旧床土	須恵器 高台付坏身	底部				①②青灰色(5B6/1)	1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	
27	旧床土	須恵器 坏蓋	口縁部				①②明青灰色(5PB7/1)	2~3mm φ 程の礫を 極少量含む 1mm φ 以下の粗粒砂を 少量含む	
28	旧床土	須恵器 高台付壺か	底部				①青灰色(5B5/1) ②青灰色(5PB5/1)	2mm φ 程の礫を 極少量含む	
29	旧床土	土師器 高台付坏か	底部				①灰白色(10YR8/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	1mm φ 以下の粗粒砂を 少量含む	風化が 著しい
30	旧耕土 旧床土	須恵器 坏蓋	つまみ	つまみ径2.5cm			①②明青灰色(5PB7/1)	1mm φ 以下の粗粒砂を 少量含む	内面に ヘラ記号
31	旧耕土 旧床土	須恵器 坏蓋	つまみ	つまみ径2.4cm			①②灰色(N6)	1mm φ 以下の粗粒砂を 極少量含む	
32	旧耕土 旧床土	須恵器 坏蓋	口縁部				①②灰白色(N7)	1mm φ 以下の粗粒砂を含む	
33	旧耕土 旧床土	須恵器 坏蓋	口縁部				①②青灰色(5PB6/1)	1mm φ 以下の粗粒砂を含む	
34	旧耕土 旧床土	須恵器 坏蓋	口縁部				①②灰白色(N7)	精緻	
35	旧耕土 旧床土	須恵器 坏蓋か	口縁部				①②青灰色(5PB6/1)	1mm φ 以下の粗粒砂を 少量含む	
36	旧耕土 旧床土	須恵器 坏か	口縁部				①②灰白色(N7)	1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	風化が 目立つ
37	旧耕土 旧床土	須恵器 坏か	口縁部				①②青灰色(5PB6/1)	2mm φ 程の礫を少量含む	
38	旧耕土 旧床土	須恵器 坏か	口縁部				①②灰白色(N7)	1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	風化が 目立つ
39	旧耕土 旧床土	須恵器 坏か	口縁部				①②灰白色(N7)	1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	
40	旧耕土 旧床土	須恵器 高坏か	口縁部				①②明青灰色(5PB7/1)	1mm φ 以下の粗粒砂を 少量含む	
41	旧耕土 旧床土	須恵器 坏身	底部				①②灰色(N6)	2mm φ 程の礫を 極少量含む 1mm φ 以下の粗粒砂を 少量含む	
42	旧耕土 旧床土	須恵器 高台付坏身	底部				①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm φ 以下の粗粒砂を 少量含む	
43	旧耕土 旧床土	須恵器 高台付坏身	底部				①灰色(N6) ②灰白色(N7)	2mm φ 程の礫を少量含む 1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	
44	旧耕土 旧床土	須恵器 高台付坏身	高台				①②青灰色(5PB6/1)	1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	
45	旧耕土 旧床土	須恵器 高坏	脚裾				①灰色(N6) ②灰色(N4)	2mm φ 程の礫を少量含む	
46	旧耕土 旧床土	須恵器 高台付壺か	底部				①②灰白色(N7)	1mm φ 以下の粗粒砂を 少量含む マンガンを多く含む	
47	旧耕土 旧床土	瓦質土器 足鍋	脚部				①灰白色(N7) ②灰白色(5Y7/1)	2mm φ 程の礫を少量含む 1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	
48	旧耕土 旧床土	瓦質土器 足鍋	脚部				①②灰色(5Y4/1)	2mm φ 程の礫を多く含む 1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	
49	旧耕土 旧床土	瓦質土器 鉢	底部				①灰色(N4) ②灰色(N5)	1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	風化が 目立つ
50	旧耕土 旧床土	青磁 椀	口縁部				素地 灰白色(5Y8/1) 釉 オリーブ灰色(2.5GY6/1)	精緻	
51	攪乱坑	須恵器 坏身	底部				①②灰白色(N7)	1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	
52	攪乱坑	瓦質土器 鉢	口縁部				①暗灰色(N3) ②灰白色(N7)	2mm φ 程の礫を少量含む 1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	風化が 目立つ
53	攪乱坑	瓦質土器 足鍋	脚部				①浅黄色(2.5Y8/3) ②浅黄色(2.5Y7/4)	2mm φ 程の礫を多く含む 1mm φ 以下の粗粒砂を 多く含む	風化が 著しい

吉田構内（吉田遺跡）の調査



土壇1



土壇3



Pit15

写真13 出土遺物①

吉田構内（吉田遺跡）の調査



18



19



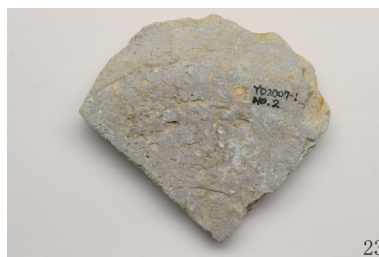
20



21



22



23



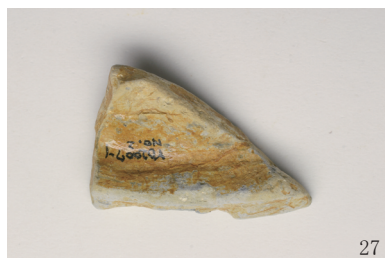
24



25



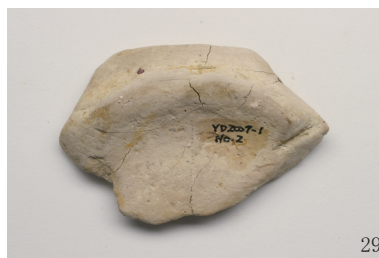
26



27



28



29

旧床土



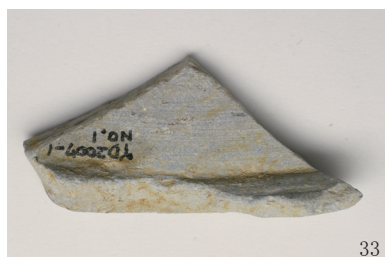
30



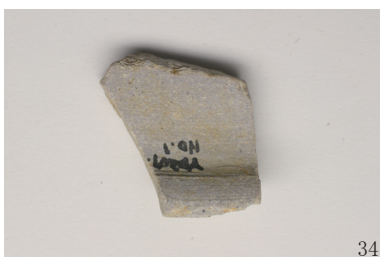
31



32



33



34



35

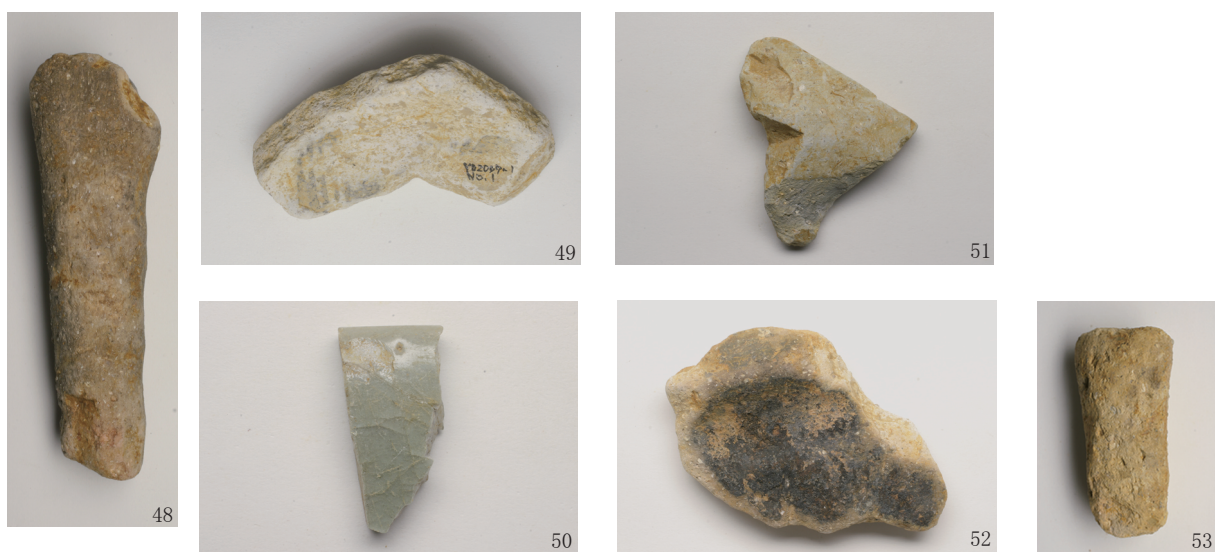
旧耕土・旧床土

写真 14 出土遺物②

吉田構内（吉田遺跡）の調査



旧耕土・旧床土



旧耕土・旧床土

攪乱坑

写真 15 出土遺物③

2. 駐車場整備工事に伴う立会調査

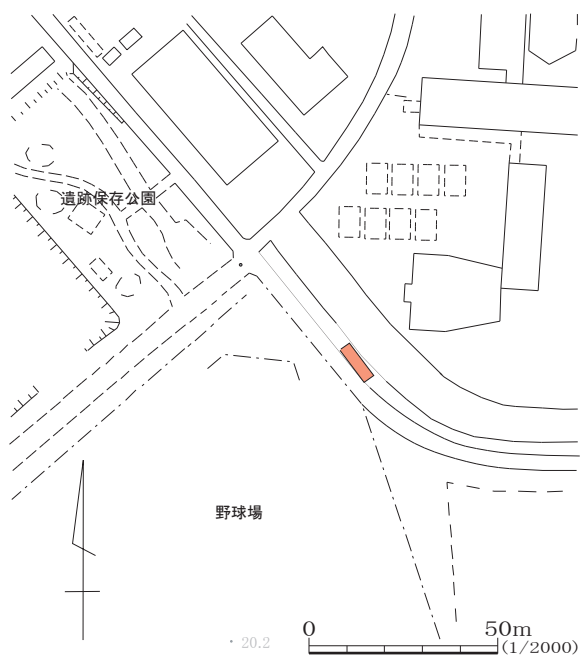


図9 調査区位置図



写真 16 掘削の様様（北西から）

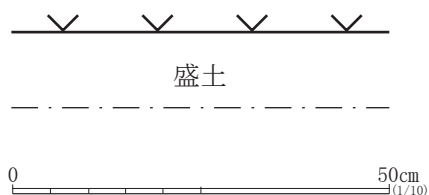


図 10 土層断面模式図

調査地区 吉田構内 J-21区

調査面積 約10m²

調査期間 平成19年 6月15日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内駐車場整備工事に伴い、経済学部校舎南側道路植樹帯の一部に地下の掘削が計画された。予定された掘削深度は0.2mと極めて浅いものであったが、計画地の北東に隣接する経済学部校舎新営に伴う試掘調査^{註1}では、大学造成時の盛土が0.1~0.4mであり、下位に旧耕土以下堆積層が確認されているため、立会調査を実施する運びとなった。

実際の工事においては、既存埋設管が予想より浅く検出されたため、造成土内0.1mが掘削されるに止まった。

本調査地点の北東約50mには、微高地上に形成された弥生時代中期から終末期にかけての集落跡が確認され、現在「遺跡保存公園」という名称で埋め戻し保存されている。集落が営まれた微高地がどの範囲に広がるのか未だ解明されていないことから、今後とも周辺地での開発工事等の計画に対して慎重に対応する必要がある。

[註]

- 1) 河村吉行（1992）「第3章昭和55年度山口大学構内の発掘調査 第1節吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研年報 X』,山口

3. 資料館（東亜経済研究所）新営工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内L-20・21区

調査面積 約550㎡

調査期間 平成19年6月25日・26日

調査担当 横山成己

調査結果 平成18年に吉田構内経済学部商品資料館北側空閑地に資料館（東亜経済研究所）の新営工事が計画されたことを受け、同年12月5日～翌年1月10日にかけて予備発掘調査が実施された。

建物建設予定地2カ所に調査区（西側調査区：東西幅2m×南北幅28m、東側調査区：東西幅2m×南北幅22m）を入れ調査を行った結果、第1層：造成土、第2層：旧耕土、第3層：旧床土、第4層：旧床土ないし耕土、第5層：河川堆積土、第6層：地山という基本層序が確認された。検出された遺構には、第2層および第4層を検出面とする水田暗渠や、第5層を検出面とする落ち込みや土壌などがある。いずれの遺構からも目立った遺物は出土しておらず、埋土の質からこれらは河川堆積土または水田耕作に伴う遺構と推察されたため、開発予定地全域を対象とする本発掘調査は不必要と判断されたが、慎重を期して基礎掘削工事時に立会調査を実施する運びとなった。

立会調査は、平成19年6月25・26日の両日にかけて実施した。総掘削面積は約550㎡に及ぶため、予備発掘調査で地下の様相を確認し得なかった開発域の東端部（地点1）と西端部付近（地点2）2カ所で層位の確認を行った。

地点1では、第1層：造成土（層厚0.5m）下に第2層：旧耕土（層厚0.25m）、第3層：旧床土（層厚0.2m）、第4-1層：旧耕土（層厚0.1m）、第4-2層：旧床土（層厚0.15m）、黒褐色粘質土層（層厚0.25m）、第5-1層：青灰色細シルト・河川堆積層（層厚0.2m）、第5-2層：青灰色粗シルト・河川堆積層（層厚0.15m）、第5-3層：暗青灰色砂礫・河川堆積層（層厚0.1m）、第6層：青灰色強粘土層（地山）が確認された。これらは予備発掘調査で確認された基本層序とほぼ同一であり、第5層上位に確認された黒褐色粘質土層は落ち込み埋土であろう。

一方地点2では、第1層：造成土（層厚0.6m）下に第2層：旧耕土（層厚0.2m）、第3層：旧床土（層厚0.25m）、第4-1層：旧耕土（層厚0.15m）、第4-2層：旧床土（層厚0.1m）、第4-3層：灰黄混じりの粘性砂層（層厚0.15m）、黒褐色粘質土層（層厚0.05m）、第6層：青灰色強粘土層（地山）となっていた。

予備発掘調査の成果と合わせて当該地の土地活用の変遷を考えると、造成土下に存する耕作土は昭和40年代初頭より開始した本学の吉田の地への統合移転以前の状況を示すものであり、さらに下位



図11 調査区位置図



写真17 基礎工事掘削の様相（東から）



写真 18 土層断面観察地点1（西から）

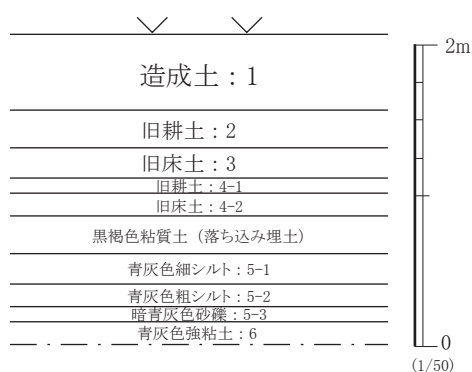


図 12 土層断面観察地点1模式図



写真 19 土層断面観察地点2（東から）

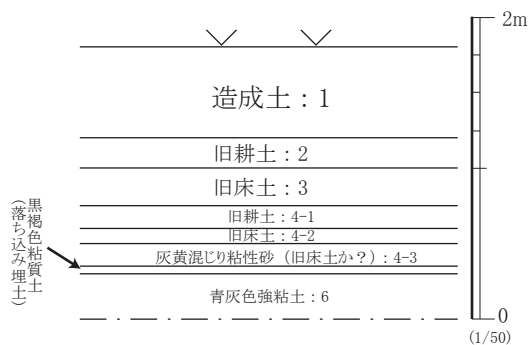


図 13 土層断面観察地点2模式図

に形成されている旧耕土・床土の存在は、この地が長期間にわたり水田であったことを物語っている。江戸時代中頃、18世紀前半に描かれた地下上申絵図「吉田村」と現在の吉田構内を照合すると、当時は本部棟周辺と農学部附属農場本館建物南方に農村集落が形成されており、周囲一帯は水田であったものと推察される。吉田構内各地における発掘調査成果もその事実を裏付けており、少なくとも本学統合移転前の吉田の景観は18世紀前半には既に成立していたものと理解して良からう。

一方でそれ以前の当該地の歴史的景観は甚だ不明瞭である。予備発掘調査と今回の立会調査で確認された土層からは、耕作地開発以前は本地が河川堆積地であったこと以外の情報が得られていない。耕地化に伴い、河川堆積土上、あるいは高所部分を削平した上に床土が敷かれたのであるが、それが何時のことなのかは各層に遺物が含まれない現状では解明する術を持たない。

経済学部校舎周辺では空闲地も減少しており、今後開発に伴う発掘調査等で新知見を得る可能性も低まっている。より広域の地下の状況に目を向け、上記の問題の解明に務めなくてはならない。

[註]

- 1) 田畑直彦（2010）「第1章第2節6. 資料館（東亜経済研究所）新営工事に伴う予備発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成18年度－』, 山口

4. 第一事務局庁舎改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内L-15区

調査面積 約5㎡

調査期間 平成19年11月7日

調査担当 田畑直彦

調査結果 第一事務局庁舎改修工事に伴い、正面入口前に階段と銘板の設置が計画された。工事は同庁舎玄関正面に階段、東側に銘板を設置するものである。同庁舎敷地では統合移転の際、山口大学吉田遺跡調査団による発掘調査で竪穴住居、溝、土壌が検出されたとされ、埋蔵文化財資料館には同庁舎敷地から出土した弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器などの遺物が保管されている。このため今回の工事に伴い、工事施工時に立会調査を行った。

工事による掘削は階段設置箇所が現地表下約20cm、銘板設置箇所が現地表下約74cmであった。調査の結果、いずれも造成土の範囲内にとどまり、埋蔵文化財に支障はなかった。

今回の工事では埋蔵文化財は確認されなかったが、調査区周辺では遺構・遺物が存在している可能性が高く、今後とも埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。

[註]

1) 小野忠熙編（1976）,山口大学吉田遺跡調査団（編）『吉田遺跡発掘調査概報』,山口

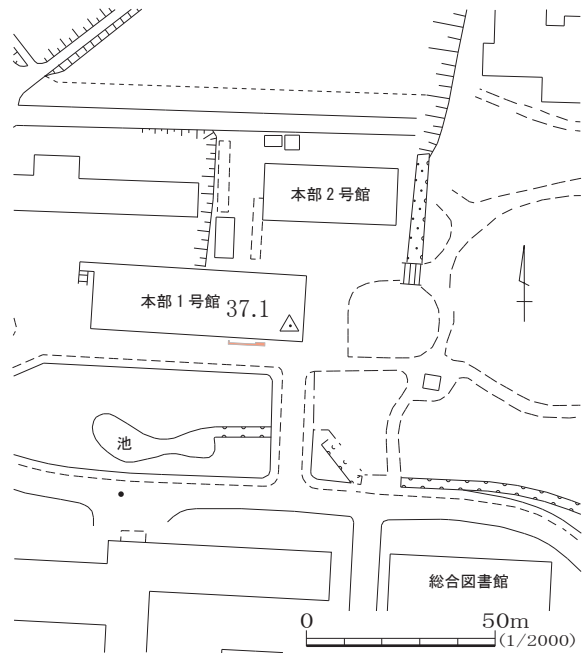


図14 調査区位置図



写真20 調査区全景（南西から）



写真21 調査区東端土層断面（北から）

5. 吉田寮前排水管敷設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内M-11区

調査面積 約11m²

調査期間 平成20年1月10日、1月15日

調査担当 田畑直彦

調査結果 吉田寮南側の道路に排水管敷設工事が計画された。工事は実験水田埋立地の東側に新設する

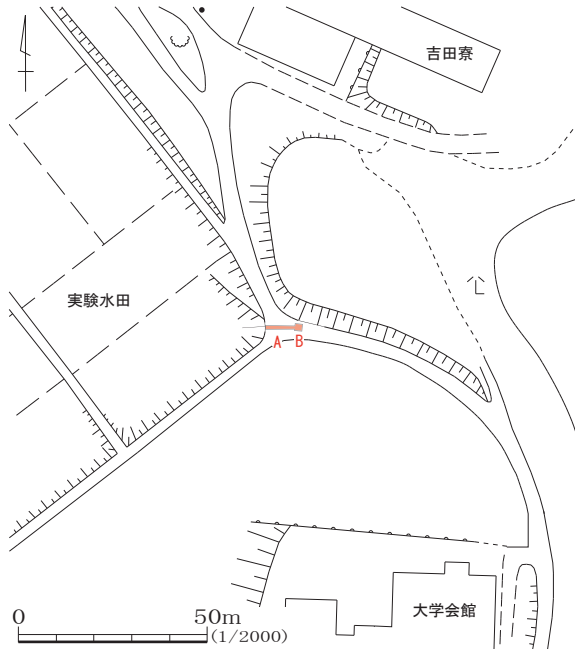


図 15 調査区位置図



写真 22 A地点土層断面（南東から）

層を検出した。以上により、調査区周辺においては今後とも埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

[註]

- 1) 豆谷和之（1995）「付篇Ⅰ 吉田遺跡第Ⅰ地区D区の調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報XⅢ』,山口
- 2) 河村吉行（1988）「第5章第1節4 農学部附属農場E7圃場排水管理設およびE6圃場進入路拡幅に伴う立会調査」山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』,山口

るピオトープに水を引くため、排水管を新設するもので、管路（A地点）は現地地表下約70cm、柵設置場所（B地点）は現地地表下約130cmの掘削を行うものであった。

今回調査区のある道路と東側の畑との間は段差となっていることから、埋蔵文化財が存在したとしてもすでに削平されていることが予想された。しかし、調査区の南側に位置する飼料園は吉田遺跡調査団による発掘調査で谷地形、柱穴などが検出され、弥生土器から近世陶磁器に至る各時期の遺物が出土している。また、昭和62年度に実施された農学部附属農場E7圃場排水管理設に伴う立会調査でも、遺物包含層、柱穴が検出されている。上記により、今回調査区においても本来は遺構・遺物が存在した可能性が高いため、立会調査を行った。

調査の結果、A地点では現地地表下約48cmまでが造成土、48～54cmが遺物包含層と考えられる黒褐色（2.5Y3/1）粘質土、54cm以下で地山である黄色（2.5Y8/6）シルトを検出した。B地点では、現地地表下52cmまでが造成土、52cm以下で地山である橙色（5YR6/6）シルトを検出した。両地点から遺物は出土しなかった。

調査区は道路造成時に大幅に削平されたと考えられるが、A地点では遺物包含層と考えられる土

6. 農学部附属農場内電源敷設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内Q-15、S-18区

調査面積 約0.5m²

調査期間 平成19年3月17日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内農学部附属農場敷地2ヶ所（A地点・B地点）に電柱を設置する計画が立案されたことを受け、立会調査を実施することになった。掘削規模はそれぞれ直径0.5m×1mである。以下に両地点の調査成果を報告する。

【A地点】（図17、写真23）

工事計画地の南に隣接する地点で実施された農学部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査では、掘立柱建物跡の柱穴列と推定される土壌群が確認されており、出土遺物から7世紀前半に所属時期が求められている。また、地山（遺構検出面）直上の造成土中からも7世紀から8世紀にかけての土器が多数出土しており、周辺一帯に古代の集落間連遺構が分布している可能性が指摘されている^{註1}。

工事掘削は、施工業者の協力を受け人力により慎重に行った。調査の結果、本地点の層序は①表土及び造成土（層厚約0.7m）、②旧耕土（層厚約0.05m）、旧床土（層厚0.2m以上）であった。遺物については、造成土内から須恵器甕の体部片が2点出土している。

上述した農業環境観測実験施設調査区では、旧耕土下に遺構検出面が存在しており、本調査地まで遺構が分布する可能性は極めて高いと言える。さらに西方約75m地点で実施した第2学生食堂増築及び改修工事に伴う発掘調査では、南東から北西に走る平安時代の大溝と、その東に同一時期のものと

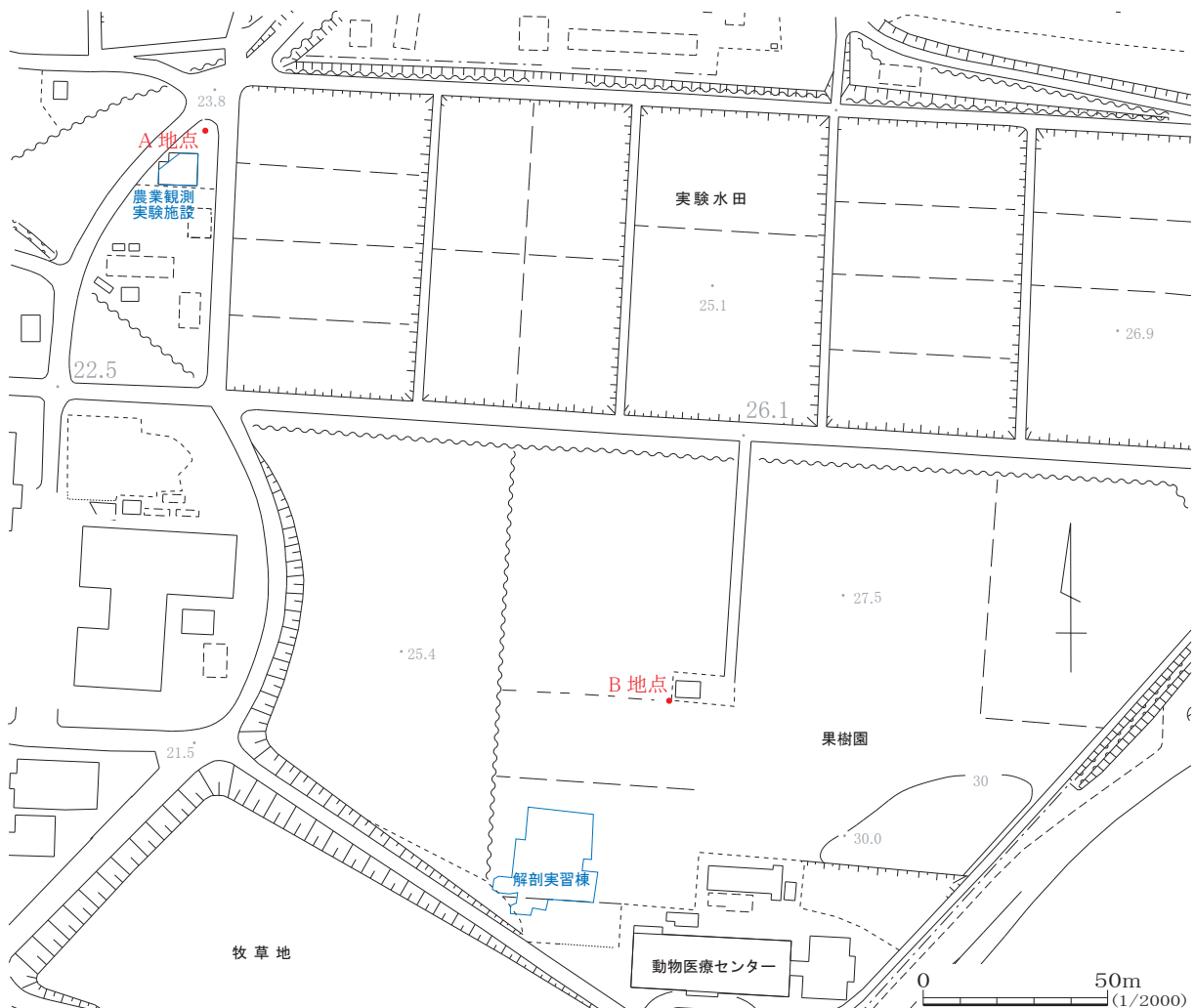


図16 調査区位置図



写真 23 A地点土層断面（南西から）

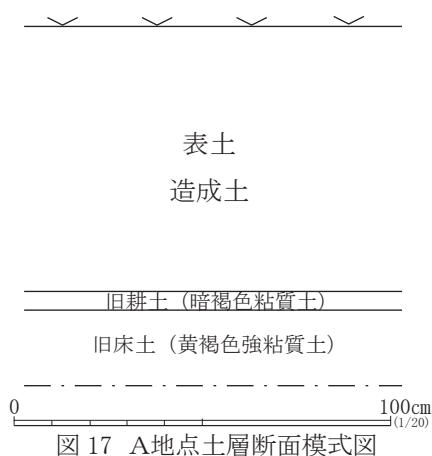


図 17 A地点土層断面模式図



写真 24 B地点土層断面（北から）

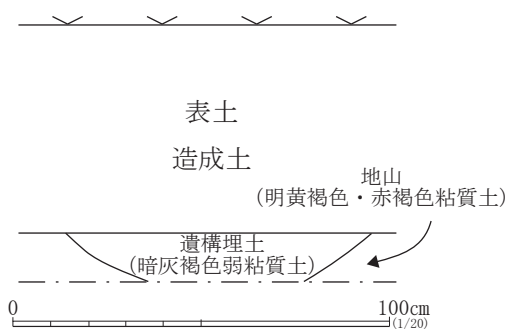


図 18 B地点土層断面模式図

推測される掘立柱建物跡群が確認されている。吉田遺跡東部丘陵台地における古代集落の形成状況には未だ不明確な部分が多く、周辺地の土地掘削に際しては慎重な対応を要する。

【B地点】（図18、写真24）

農学部附属農場果樹園のほぼ中央部分にて実施した。果樹園内であるため、周辺地での調査歴は限られているが、調査地の南西約40m地点で実施した農学部解剖実習棟新営に伴う発掘調査では、古代の遺物を包含する河川跡とともに掘立柱建物跡群が確認されており、周辺に古代官衙関連施設が存在する可能性が指摘されている。^{註3}

立会調査の結果、本地点の層序は①表土及び造成土（層厚約0.4m）、②明黄褐色・赤褐色粘質土（地山）であった。また、地山を掘り込む柱穴と推定される遺構も確認された。遺構埋土は暗灰褐色粘質土であり、中世以降の遺構埋土である可能性が高い。遺物は出土していない。

従来より、農学部附属農場敷地には広く埋蔵文化財が分布している可能性が指摘されていた。今回立会を実施した2地点での調査成果は、その可能性を更に高める結果となっている。今後とも農学部附属農場敷地内での地下の掘削を伴う工事計画等には十分な埋蔵文化財保護措置が必要である。

[註]

- 1) 河村吉行（1992）「付篇Ⅰ第3章昭和55年度山口大学構内の発掘調査 第2節吉田構内農学部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報X』,山口
- 2) 田畑直彦（2004）「第8章2平成10年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
- 3) a:田畑直彦（2002）「山口大学構内吉田遺跡－農学部校舎改修（解剖実習棟新営）に伴う発掘調査略報－」,山口考古学会（編）『山口考古第22号』,山口
b:田畑直彦（2004）「第8章6．平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口